

145. 守山市杉江遺跡出土の 中世土器について

1. 調査の経過

守山市大門町から杉江町・山賀町を抜けて琵琶湖に至る新守山川改修工事に先立つ埋蔵文化財の調査は、1983年度に試掘調査を行ない、1984年度から杉江遺跡の発掘調査を行なっている。湖岸から約800m内陸部より主要地方道彦根近江八幡大津線（通称浜街道）までの幅約50m、長さ約250mの調査対象区間のほぼ全面に、2面の中世遺構面を検出した。出土遺物は、日常雑器である土師器・黒色土器を主体とし、国産陶磁器・輸入陶磁器・石製品・木製品等多種多様であるが、今回は、堀状遺構から出土した終末期の黒色土器を含む一群の中世土器について報告する。

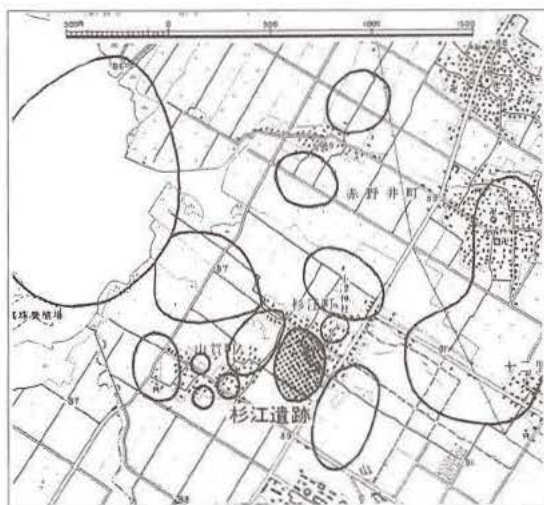
2. 遺跡の概要

杉江遺跡の所在する守山市杉江町は、湖東平野の南西端の自然堤防上に立地し、その西方にひろがる琵琶湖と密接に関連する位置にある。当遺跡は、従来より中世集落跡として知られていた。現集落とはほぼ重複しているため、その実態は不明瞭であったが、今回の調査では、縁辺部ではあるが区画溝を持つ鎌倉時代後半～室町時代前半の集落の一部が明らかになった。

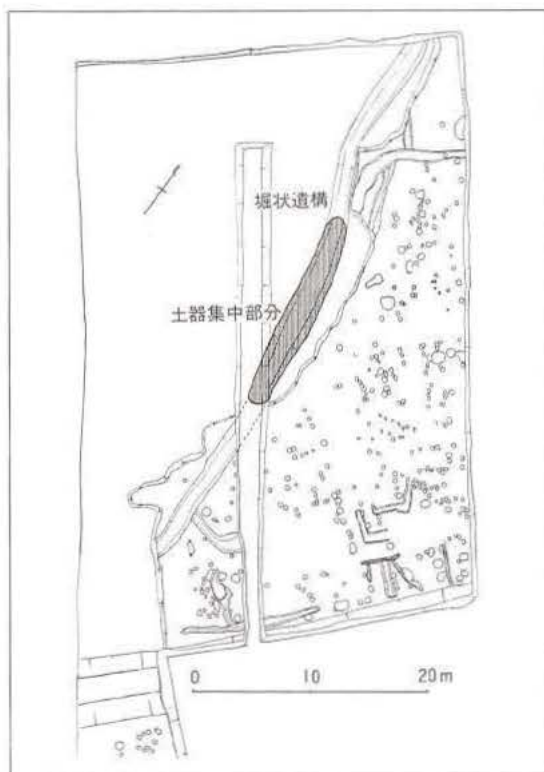
建物群は大きく3群に分かれ、各々に区画溝が巡っている。このうちの2群については、自然地形の高低差を利用し、その周囲に河道から水を引いたと想定される堀状遺構を巡らせ、約80cmの比高差を持つ高台部と低位部とを形成している。建物群の構成は、1区画を完全に検出していないため不完全ではあるが、大型の3間×4間程度の掘立柱建物、あるいは同程度の礎石建物1棟、2間×3間程度の掘立柱建物数棟、2間×2間の総柱の倉庫1～2棟を基本とし、井戸1～2基、屋敷墓と想定される土壇墓1～3基、土壇・溝等が備わると推定される。礎石建物に隣接する溝からは、少量ながら瓦類が出土しており、部分的に瓦が葺かれていた可能性がある。1区画は、一辺が約60m前後であり、調査区南半を蛇行する旧河道を集落南端の自然境界とし、現集落下に向かって拡がりを持っている。(註1)

3. 堀状遺構出土の土器

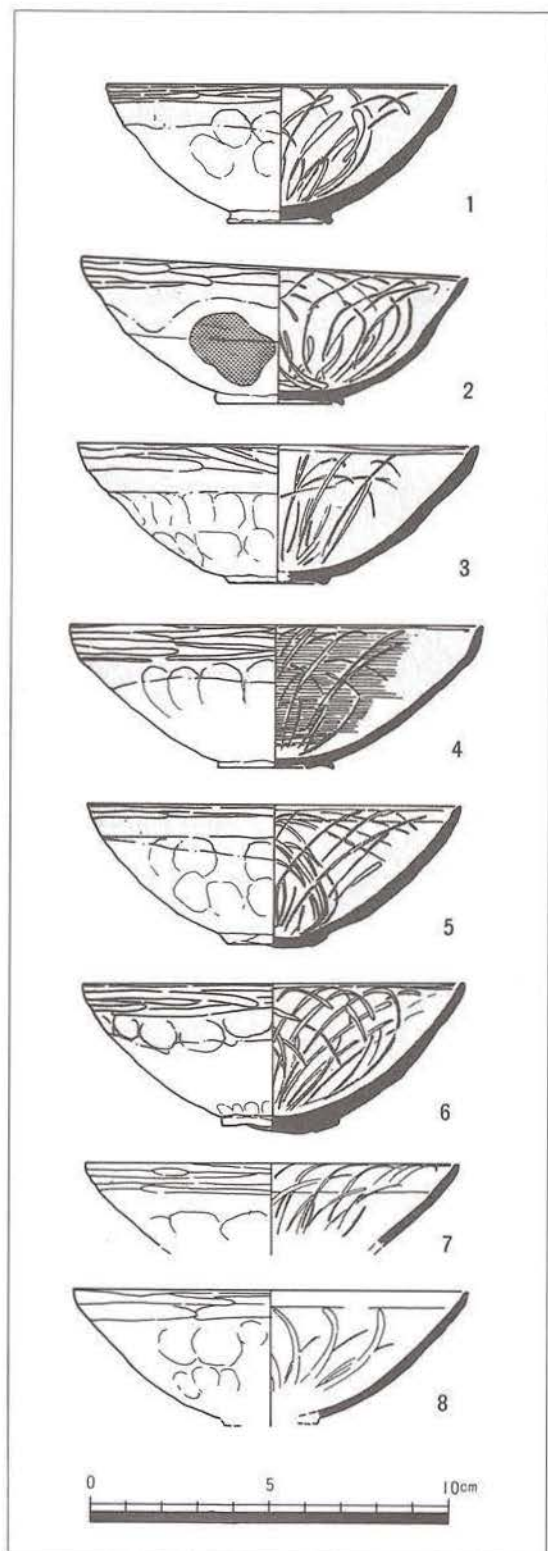
ここで取り扱う遺物は、3群の建物群のうち最も東



第1図 遺跡位置図



第2図 遺構平面図



第3図 黒色土器実測図

側に位置する一群を囲む幅約3m、深さ1~2mの堀状遺構から出土したものである。遺物は遺構内の全体に含まれるが、中央部の約20mの部分に集中する。

○黒色土器(第3図)

第3図1~6は、いずれも碗形土器である。体部はあまり内彎せず直線的に開き、口縁端部をやや直立気味に屈曲させるものも見られる。器壁は極めて薄く、堅緻である。1~4では高台が縮少・偏平化しながらもなおその機能を保持しているが、5・6では丸底の底部が突出し、高台は完全に形骸化している。内面のラセン状ヘラミガキはかなり密に施され、口縁部外面の横方向のヘラミガキも3~5条施されている。口縁部外面のヘラミガキは一部内面にも及び、口縁端上面に平坦面を持つものも存在する。体部外面・高台部周辺に放射状ヘラミガキや口縁部内面の沈線は省略されている。4の内面には、ヘラミガキを施す以前の横方向のハケメが顕著に残存している。また、2の体部外面中央部には、不整形の墨書が認められる。法量は、口径が10~11cm前後、器高が4cm前後である。かなり小型・偏平化しており、小碗の趣きである。

7・8は、以上の黒色土器と同様の形態・手法上の特徴を備えているが、炭素を吸着させておらず、灰白色~橙灰白色を呈している。これが、未製品であるか、炭素吸着工程の意識的な省略であるかは不明であるが、黒色土器と同様に用いられていたと想定される。量的には、極めて少ない。

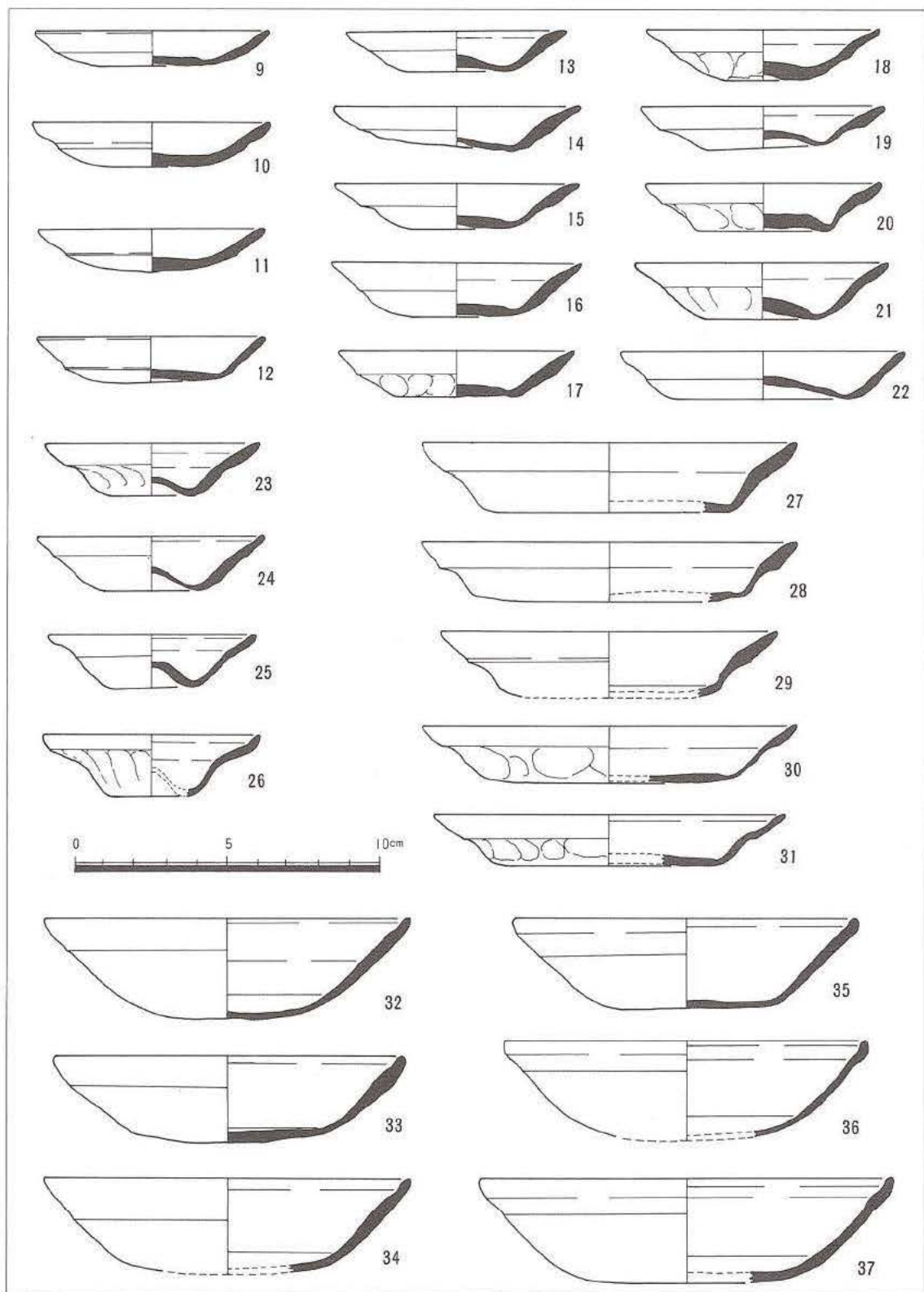
○土師器皿類(第4図)

土師器皿類としては、口径7~8cmの小皿、口径11~12cm前後の大皿、碗形様の大皿の3種に大別される。

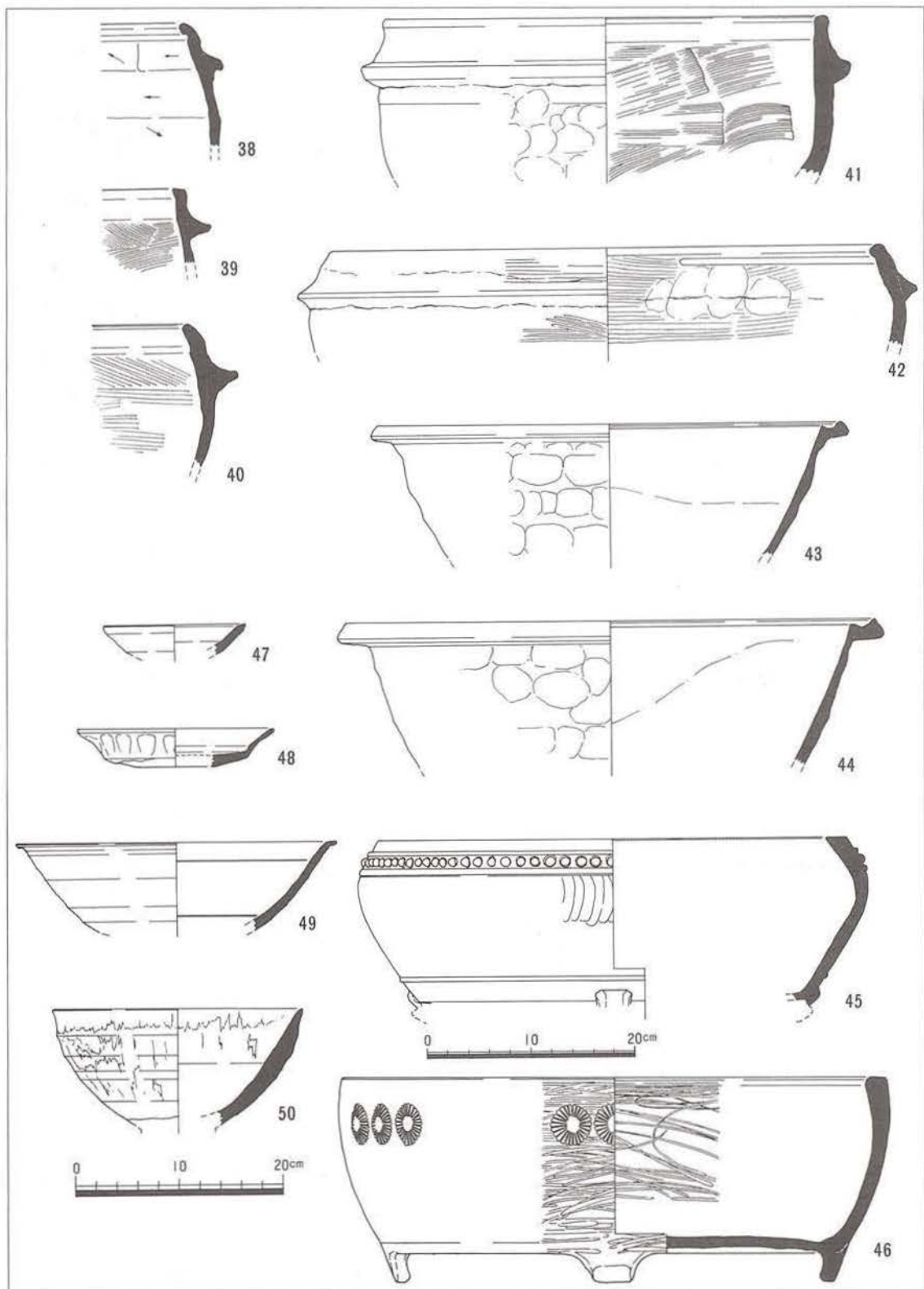
第4図9~12は、口縁部がゆるやかに立ち上がり、口縁部のヨコナデと未調整の体部との間に若干の段を有するものである。口縁端部は外反せず、肉厚で丸くおさめている。法量は口径が約7.5cm、高さ約1.5cmであり、色調は淡灰褐色系である。量的には極めて少ない。

13~17は、底部から口縁部への立ち上がり部分の器壁が指による強いつまみ上げによって薄くなり、口縁部を肥厚させるものである。底部はややあげ底であり、立ち上がり部外面には指頭圧痕が顕著に見られる。内面には一方向のナデが施されている。18~22は、立ち上がり部の屈曲・口縁部の肥厚・あげ底の傾向がより明確になっている。内面はやはり一方向のナデにより極めて平滑に仕上げている。法量は、口径が8cm前後、器高1.5~1.8cmで、色調は茶灰褐色~橙灰色系である。量的には、13~22の形態のものが土師器小皿類の大部分を占めている。

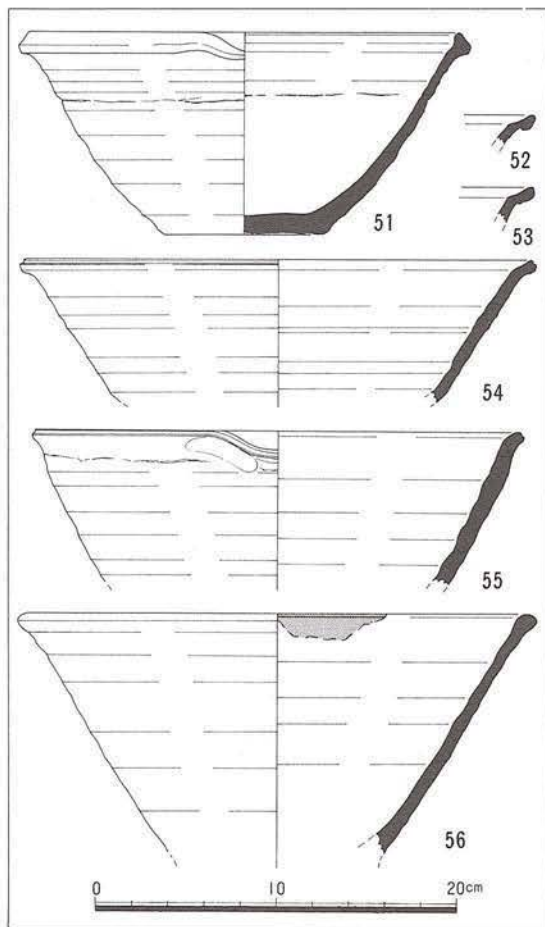
23~26は、底部中央部を指圧によって大きく突出させる、所謂へそ皿である。口縁端部がやや巻き込まれ、



第4図 土師器実測図



第5図 その他の土器実測図(1)



第6図 その他の土器実測図(2)

体部はS字状を呈する。法量は、口径が7cm前後、器高2cm前後である。胎土は1~2mm大の砂粒を含み、やや粗いものである。色調は白色系であり、9~22、27~31の褐色系のものとは異なる。量的には極めて少ない。

27~31は、褐色系の大皿である。立ち上がり部の器壁がつまみ上げによって薄くなり、口縁部が肥厚する特徴は、13~22の小皿と共通する。底部はあげ底にはならず平底である。底部外面には、板目状の圧痕が認められる。体部の指頭圧痕は極めて粗雑であり、変形の著しいものも見られる。法量は、口径が12cm前後、器高が2cm前後である。

32~37は、椀形様の大皿である。平底の底部からゆるやかに内彎して立ち上がる体部は、ヨコナデによって平滑に仕上げられ器壁も薄い。内面は、底部が一方方向のナデ、体部はヨコナデである。口縁部内面の下方を若干肥厚させ、口縁端部をやや巻き込む傾向にある。法量は、口径が12~14cm、器高が3~3.5cmである。胎土・色調は、23~26のへそ皿と類似する。

○その他の土器類(第5・6図)

第5図41・42は、土師質の羽釜である。41は、口縁部が直立し、体部も直線的に伸びる。器面調整は、外面が指頭圧痕、内面が横方向の細いハケメである。42は、口縁部が内傾し、体部も丸味を帯びている。器面には、内外面共に横方向の粗いハケメが残っている。

38~40は、瓦質の羽釜である。38・40は口縁部が内彎し、体部にも丸味を持つものである。口縁部は内外面共にヨコナデによって平滑に仕上げられ、体部外面はケズリ、内面はハケあるいはナデにより調整されている。39は、口縁部がほぼ直立するものである。

43・44は、山城型の瓦質鍋である。2段に屈曲して受口状の口縁部になっている。受け部内面の突出が大きく、口縁端部は屈曲すると言うよりは、丸く肥厚させておさめる感じである。体部調整は、外面は指頭圧痕によってかなりいびつになり、内面はナデによって平滑に仕上げられている。体部はやや鉢形に近い形態になるものと想定される。

45・46は、瓦質土器の火舎である。45は、体部上半が大きく内彎する形態のものである。口縁部外面やや下方に、断面半円形の突帯2条が巡り、その間は円形突起で充されている。また、体部下位にも断面半円形の突帯が1条施されている。体部調整は、外面上半が短冊状のやや太めのヘラミガキ、外面下半・内面はナデによって極めて平滑に仕上げられている。底部~立ち上がり部分に貼り付けられた脚部はヘラケズリによって成形され、獣足になると想定される。46は、体部が若干内彎するが、口縁部がほぼ直立するものである。体部外面は、ナデののちに横方向のヘラミガキが上半では緻密に、下半ではやや粗雑に施されている。上半には、26弁のスタンプの菊花文が3個を1単位として6方向に施されている。内面は、横方向のナデののちに、外面よりは粗雑な横方向のヘラミガキが加えられている。このヘラミガキの一部には、ラセン状になるところも認められる。底部は、内面は一方方向のナデ、外面は板状工具による一方方向のナデによって調整されている。脚部は体部との境がほとんどない板状のもので、指頭圧痕・ナデによって成形されている。

47~49は、白磁類である。47は、ゆるやかに内彎するもので、口縁部端面には施釉しない口禿の小皿である。48は、平底の底部から2段に立ち上がり、口縁部が外反する。釉は、内面~口縁部外面まで施されている。口縁部外面は、指頭圧痕によって若干花弁状を呈している。49は、ゆるやかにひろがる椀で、口縁端部を大きく外方へ突出させる。内面には、口縁部下方と見込み上方に、各々1条の浅い沈線が巡っている。50は、国産の天目茶椀である。器壁は肉厚で、口縁端部を細く尖がらせておさめている。

第6図51は、東播系の片口のこね鉢である。口縁部は断面三角形を呈し、内面は使用のため磨滅している。

52～54は古瀬戸の盤である。52・53は、屈曲して外方へ突出する口縁は折返し口縁であり、玉縁状を呈する。54は、若干肉厚な口縁端部に1条の沈線を巡らす。釉色は黄橙色～淡緑灰色を呈し、内外面共にハケ塗りである。

55・56は信楽のこね鉢である。55は片口で、口縁端部に1条の沈線を施す。56は口縁部と若干肥厚させて丸くおさめる。口縁部内面の一部に、スス状物質の付着が認められる。色調は黄褐色～橙褐色である。

その他の遺物としては、滑石製石鍋や箸類を主とする木製品が出土している。

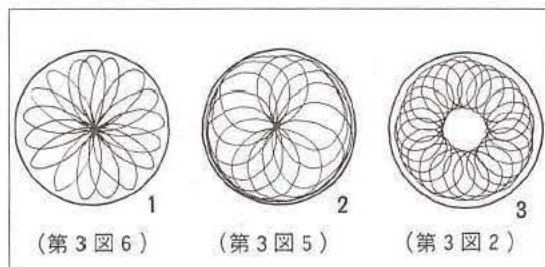
4. まとめ

3で紹介した土器の所属時期の検討と、当該時期の黒色土器が持つ問題点に若干触れ、まとめにかえる。

まず土師器小皿類を見ると、I：ゆるやかに立ち上がるタイプ(9～12)、II：立ち上がり部が薄く、口縁部を肥厚させ、ややあげ底のタイプ(13～22)、III：底部中央部を内面に突出させる白色系へそ皿(23～26)に大別される。横田洋三氏の編年観(註2)に従えば、タイプIは褐色系小皿A₂タイプ、タイプIIは褐色系小皿A₃タイプ、タイプIIIは白色系へそ皿B₁タイプに相当し、各々13世紀末～14世紀前半、14世紀後半、14世紀後半～15世紀初頭を所属時期とする。大皿類は、褐色系小皿A₃タイプと同様の特徴を持つ27～31と、碗形様の32～37に大別される。前者は横田氏分類の褐色系大皿A₃タイプ、後者は白色系B₁タイプにあたる。また、前者は褐色系小皿A₃タイプと、後者は白色系へそ皿B₁タイプと共伴すると想定される。

次に黒色土器を見ると、高台部が機能を僅かながらも保持する1～4と、まったく形骸化している5・6に大別される。1は、高台部を除けばむしろ後者のものに形態・分量は近似する。前者は器高が後者のものとはほぼ同じであるが口径がやや大きいため、全体にやや偏平な印象を与える。森隆氏の編年観(註3)に基づけば、前者がⅢ-3段階、後者がⅢ-4段階に相当しようが、土師器皿類との共伴関係は、当遺跡では把握し得ない。ただし、概ね14世紀後半である土師器皿類において、褐色系小皿A₃・大皿A₃タイプを主体とする段階と、これに白色系へそ皿B₁・大皿B₁タイプを若干含む段階との細分が可能であり、黒色土器の2者が各々に対応する可能性もあるが、最終末の黒色土器の所属時期の問題と関連し、今後の資料増加が待たれる。

最後に、黒色土器内面に施され、近江型黒色土器の特徴の1つでもあるヘラミガキに関して若干触れておきたい。終末期においては、体部外面のヘラミガキは消滅するものの、口縁外面・体部内面のヘラミガキは



第7図 ヘラミガキ模式図

依然かなり緻密に施されており、そのヘラミガキにもいくつかのバリエーションが存在する様である。1つは明確にラセン状を呈するものであり、1つは単一方向または複数方向の弧状のヘラミガキを連続させるものである。ラセン状のものには、見込み中央部を中心とするものと、2の様に見込みの半径1.5cm内にはミガキが及ばないものがある。2は、ラセンを横位に連続させることにより見込み中央部に無文部分が生じている。時期・形状は異なるが瓦器碗のラセン状暗文と似かよう。弧状のヘラミガキを連続させるものは、炭素を吸着させていないが7・8、また野洲町街道遺跡3トレスD-01の黒色土器(註4)が相当する。森氏はこれを放射状交差ヘラミガキと呼称し、近江型黒色土器独自の技法の1つとしており(註5)、街道遺跡では2方向の弧状のヘラミガキを交差させるものばかりであるが、杉江遺跡ではラセン状ヘラミガキがむしろ大半である。放射状交差ヘラミガキの呼称の適・不適は別として、ラセン系と非ラセン系の2種のヘラミガキが、技法の系統・出自を異にするのか、あるいは時期差、地域差—工人集団の違い—のいずれを示すのかは、今後の課題として残される点である。

近江においては、黒色土器の終焉の問題を含めて14世紀～15世紀の土器群に関してはまだまだ不明瞭な点が多い。今回報告した杉江遺跡堀状遺構出土の一群の土器は、時期幅はあるものの、14世紀後半の土器様相の一端を示していると言えよう。これらの資料が、今後の研究の進展の中で、少しでも活用されれば、幸いである。(小竹森直子)

註1. 滋賀県教育委員会 (財)滋賀県文化財保護協会 1986 『新守山川改修工事関連遺跡発掘調査概要—守山市杉江遺跡—』

註2. 横田洋三 19 「出土土師器編年試案」『平安京跡研究調査報告』第5輯

註3. 森隆 1986 「滋賀県における古代末～中世土器」『中近世土器の基礎研究II』

註4. 註3に同じ

註5. 註3に同じ